

ドゥーシェク夫人が歌った「バセットホルン助奏付ロンド」とは？（その 2）
—— クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調（断片）K.581a あるいは
ロンド「あなたを愛している人の望みどおり Al desio di chi t'adora」K.577 ——

野口秀夫

1. はじめに

鳥代：前は 1791.4.26 にドゥーシェク夫人が歌った曲の候補として、『皇帝ティートの慈悲』からヴィテリアのロンド「もはや花の」を取り上げ、その適合可否を論じました^{注1}。結論は否定的なものでしたので、今回は更なる候補について議論することになります。

犬輔：教授から、既に参照した論文の中に新たな候補が潜んでいた、とヒントを出して下さったので、改めて読みなおしましたが、新候補については舌足らずの説明ばかりでした。

教授：ご苦労なことであった。それで前回参照しなかった文献にも当たる必要が出てきたということだね。では諸君たちの調査報告を聞こう。

2. クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調（断片）K.581a [Fr1790g] を候補に

鳥代：一番身近だったケツヒェル第 6 版（1964）を参照するのを失念していました。編集者はフランツ・ギーリング、アレクサンダー・ヴァインマン、ゲルト・ジーバースの 3 名で、ギーリングが加わっているにもかかわらず彼の前回の自説とは全く異なった提案になっているのは全く奇妙なことです。

犬輔：そこでは何と言っているんですか。

鳥代：クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調（断片）K.581a が 1791.4.26 のドゥーシェク夫人の演奏会で上演された曲の草稿に当たる可能性があると言っているのです（K.581a はまたバセットホルン協奏曲 ト長調＋イ長調（草稿）K.621b とも関係があるかも知れないとも述べています）。

犬輔：K.581a は冒頭 9 小節のクラリネットのメロディが《コシ・ファン・トゥッテ》K.588 No.24 のフェッランドのアリアと全く同一であることが従来から指摘されていますが、《コシ》との関連を除外したとしても、この五重奏を伴奏にしてテノールであろうとソプラノであろうと歌を展開するのには、独奏楽器が歌手より突出しすぎていて違和感を覚えます。

鳥代：草稿ですから完成時に独奏楽器を少し引っ込めることはできると思われます。

教授：そもそも 1791.4.26 のロンドが器楽用のロンドだということはありえないかね。

犬輔：その場合、独奏楽器が「オブリガート」という表現でいいのでしょうか。

鳥代：オブリガートを「助奏」と解釈するとそぐわないですが、「必須」と解釈すればオブリガートクラリネット付き弦楽四重奏曲はありうると思われます。モーツァルトの初期のヴァイオリンソナタを「オブリガートヴァイオリン付きクラヴィーアソナタ」と呼ぶことができますから。

犬輔：そうであればバセットホルン五重奏のことになりますよ。その場合は独奏者名がプログラムに載るはずでしょう。

鳥代：ところでモーツァルトは K.581a にどのような楽器を指定しているのですか。クラリネット五重奏というのは後世の命名でしょう。

教授：そうだ。モーツァルトは表題はおろか。楽器も指定していない。Clarinetto in A という記入はマクシミリアン・シュタードラーの筆跡である。

鳥代：いつ頃の作曲なのでしょう。

教授：用紙の透かしは Wz100 と分類されており、1789 年ヴィーン製の用紙であること、K.588、K.620 や K.621 にも使われていることから^{注2}、それらと同時期の草稿であると分かる。

犬輔：1789 年以降ということであれば既にいわゆるバセットクラリネットを使うことができたので、普通のクラリネットでは出せない es 音（記譜音）が書かれていることに納得しました。

教授：バセットホルンに変更する必要は無いということだね。もつとも調を変える場合はその限りではないが。

鳥代：この曲をバセットホルン五重奏 イ長調として演奏している CD がありますが、イ長調のままわざわざ G 管のバセットホルンで演奏しているのでしょうか。バセットホルン特有の低音を生かすためにはト長調かヘ長調に移調するのが妥当と思われます。

犬輔：自作品目録に記載されていないことから、紛失してしまったのではなく、そもそも完成稿は存在しなかった可能性が高いのではないだろうか。

教授：ではその他の候補に移り給え。

3. ロンド「あなたを愛している人の望みどおり」K.577 を候補に

鳥代：ケッヒェル 2024 版をよく見たところ「オブリガート・バセットホルンを伴うロンドという記述は、[K.621 No.23 以外に] K. 577 にも当てはまります」とそっけなく書かれていました。

犬輔：ここでロンド「あなたを愛している人の望みどおり Al desio di chi t'adora」K. 577 に関する論文を探す必要が出てきたわけです。

鳥代：そのような論文がありました。マリウス・フロトホイス Marius Flothuis (1914–2001) の『1791.4.26 にどのアリアがヨゼフ・ドゥーシェク夫人によって歌われたか？』(1989) にはこう書かれています^{注3}。「[プログラム] 第 6 曲の文言 mit obligaten Bassete-Horn (オブリガートのバセットホルンを伴って) は、誤植である可能性が高い余分な e (Bassete-Horn) は別として、明らかに文法的に正しくありません。mit obligaten は複数形を示しますが、Basset(e)-Horn は単数形です。つまり、与格と対格の混同 (南ドイツとオーストリアではよくあることです。モーツァルトの手紙でさえ、mit が対格で構成されていることが時々あります) でない限りは、何かが間違っているということです。obligaten を与格複数形と解釈すると、Bassethörnern と読みます。しかし、そこに落とし穴があります。当時、特に外来語では複数形が示されないことがよくありました。その一例 (多くの例がありますが) は、モーツァルトの 1781.1.3 の手紙です：「二つのヴァイオリン、ヴィオラ、ベース、二つのオーボエのための auf 2 violin, Bratsch, Bass und zwei Oboen 非常に簡単な行進曲を作りました」。以上から、ここでは [単数形であっても] 複数のバセットホルンを扱っていることを意味するかも知れません。話をさらに複雑にしないために、とりあえず二つと仮定しましょう。モーツァルトは二つのオブリガート・バセットホルンでアリアを書いたことがあるのでしょうか。はい、あります。すなわち「あなたを愛している人の望みどおり」K.577 で、これは彼が 1789.7 に、ヴィーンで再演された《フィガロの結婚》でスザンナを演じたアドリアーナ フェッラレーゼ・デル・ベーネのために書いたものです。このアリアの形式は「もはや花の」[K.621 No.23] のアリアと非常によく似ており、モーツァルトはこれを「ロンド」とも呼んでいます。音域は h-a" で、この点でもヴィテリアのアリア (a-a") とほとんど変わりません。ヨゼフ・ドゥーシェクのために作曲されたアリア K.528 のソロパートも a" を超えず、低音域は使用されていません。

言及されているロンドがヴィテリアのアリアである可能性があるというドイチュとギークリングの見解と同様に、これがスザンナのアリア K.577 を指す可能性があるという私の示唆も、全くの仮説ですが、言語学的議論に基づいて少なくとも真剣に受け止められるべき仮説であると私は考えています」。

犬輔：突っ込みどころが満載ですよ。まず、Horn がドイツ語にとって外来語かどうかです。調べたところ「原始ゲルマン語の語幹 hurni- (角; 頭) から」という horn 語源説があり^{注4}、また 1742 年に名付けられたという French horn はおそらくフランス起源ですが、ドイツでは Waldhorn と呼びますから、Horn という楽器名はもともとドイツにあって、ドイツの固有語となっていたと解釈できると思います。

教授：なるほど。他の突っ込みどころは何かね。

犬輔：「与格と対格の混同」とありますが、Horn は中性名詞ですから与格なら obligatem Horn、対格なら obligates Horn です。仮に Horn が男性名詞であれば与格は obligatem Horn、対格なら obligaten Horn でフロトホイスの言うとおりの説明になります。つまり Horn を男性名詞だと解釈しているということです。しかし繰り返しになりますが、正しくは楽器の Horn は中性名詞であり、月名の Horn が男性名詞です (groszer Horn が「1 月」を kleiner Horn が「2 月」を意味します)^{注5}。

教授：重要な指摘だ。

鳥代：整理すると単数なら mit obligatem Bassethorn、複数なら mit obligaten Bassethörnern が正しいということになるわね。プログラムの表記はこれらいずれとも一致しないから、格変化の間違いか、複数形の間違いかを判定しなくてはならないわ。フロトホイスは (Horn が外来語でないとしても) 複数形を間違えていると解釈して「二つのオブリガート・バセットホルンでアリアを書いた」曲を候補としたということでしょう。

教授：つまり彼の説は決定打ではないということだ。

犬輔：ヘルガ・リュウニング (1974)^{注6} がもっと緩めの解釈を提示しています。「1789 年に《フィガロの結婚》のために作曲されたロンド「あなたを愛している人の望みどおり」K. 577 は、当初はバセットホルン 2 本とファゴット 2 本で演奏されていたが、最小限の変更を加えることで、管楽器セクションをバセットホルン 1 本とファゴット 2 本に減らすことができる。ヨゼフ・ドゥーシェクのために作曲された 2 つのアリア K. 272 と K. 528 から判断すると、歌声の特徴と音域は確かに歌手の能力と一致している」というのです。

鳥代：柔軟な頭脳が新たな展望を開くものなのですね。

4. ロンド「あなたを愛している人の望みどおり」K.577 とは

教授：ここで1789年の《フィガロの結婚》について調べ給え。

犬輔：まず初演に遡りましょう。《フィガロの結婚》は1786.5.1にブルク劇場で初演され、モーツァルトが2公演を指揮しました。続いてヨーゼフ・ヴァイグルが指揮し、同年中に8つの上演(5.8, 5.24, 7.4, 8.28, 9.22, (おそらく9.23も), 11.15, 12.18)が行われました⁷。

鳥代：これとは別に1786.6には皇帝の命により宮廷劇場で特別上演がありました。

犬輔：でも1787年、1788年には上演がなかったんですね。

鳥代：その頃、プラハのパスクーレ・ボンディーニ劇団から上演の申し入れがあり、1786.12に幕を開けました。モーツァルトは1787.1.17にその公演を聴き、1.22には自ら指揮をとりました。

犬輔：そしてヴィーンでは1789年に復活上演が計画され、スザンナ役はイギリスに帰国したアンナ・ストラーチェから、1788年以来ブルク劇場に所属していたアドリアーナ・フェッラレーゼ・デル・ベアーネに変わることになりました。

鳥代：モーツァルトは1789.4.8にドイツへ向かい、同年6.4に帰国していますから、おそらく帰国後に計画を知ったものと考えられます。彼女のためにモーツァルトは第4幕のアリア「恋人よ、早くここへ Deh vieni non tardar」K.492 No.28を「あなたを愛している人の望みどおり Al desio di chi t'adora」K.492 No.28a = K.577に書き換えたと言われています。

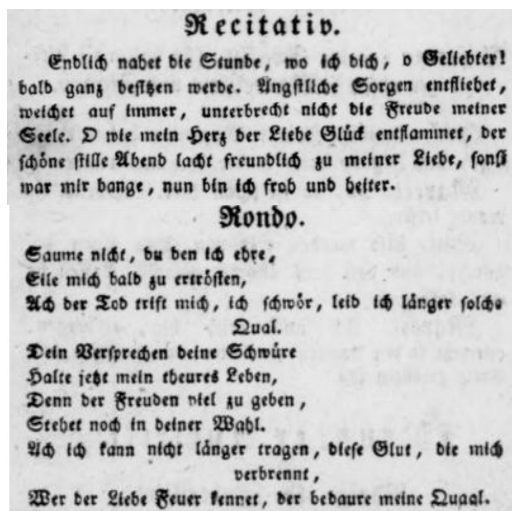
教授：ちょっと待った。なぜそのようなことが分かるのかね。根拠となる復活上演のリブレットおよび演奏用総譜について調査しなくてはならない。

犬輔：はい、リブレットを調べましょう…。あれっ、1789年のリブレットはcoragoで検索してもヒットしません。

教授：新全集校訂報告⁸には「1789年のヴィーン版台本は確認されていない。1786年のリブレットの現存記録が驚くほど充実していることを考えると、1789年に新しい台本が出版されたかどうかはむしろ疑わしい」と書かれている。

犬輔：何故それを早く仰っていただけなかったのですか。では逆に質問します。1789年の台本が存在しないとして、それ以後の台本でK.577のテキストが載っているものはないのでしょうか。

鳥代：それについてはわたしが調べたわ。1798年ヴィーンでの上演です⁹。イタリア語でなくて、ドイツ語のジングシュピールの形式ですが、第四幕第9場はこうなっています。



レチタティーヴォ

愛しい人よ、ついに、あなたを完全に私のものにする時が近づいている！不安な思いは消え去り、永遠に去った。私の魂の喜びを邪魔しないで。ああ、私の心は愛のかげから湧き上がり、美しく静かな夕べは私の愛する人に優しく微笑む。かつて私は恐れていたが、今は幸せで明るい。

ロンド

どうか遅れないで、私が尊敬するものよ、早く私を慰めてください。ああ、死が私を襲うと私は確信します、私がずっとこのまま苦しんでいるなら。あなたの約束と誓いが、今こそ私の大切な命を守ってくれるでしょう。多くの喜びという贈り物が、まだあなたの手の届くところにあるのだから。ああ、私を燃やすこの燃えさしには、もう耐えられない。愛の炎を吐く人は、私の苦しみを憐れむでしょう。

K.577の歌詞を訳しましょう。「あなたを熱愛する者の願いとして、飛んで来て、ああ、私の希望よ！私は死んでしまいます、もし空しくあなたが私にため息をつかせるのなら。約束を、誓いを、ああ！思い出してください、ああ、私の最愛の人よ！そして、愛の神が私に希望を与えてくれた安らぎの時を！ああ！もう私は抵抗できません、私の心を燃え上がらせる情熱に。愛の感情を理解できる方は、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう」。

犬輔：なるほど。No.28のレチタティーヴォは元のまま、No.28のロンドはNo.28a=K.577に変えられていますね。でも1798年のドイツ語上演の曲が、遡って1789年上演のときのものだという根拠にはならないですね。1789年以後の上演に起源があるかも知れないでしょう。別の方から探ってみましょう。K.577の自筆譜に手掛かりはないのですか。

教授：校訂報告によれば自筆譜は存在が確認されていない。しかし、スケッチ(校訂報告資料A^k)およびクラヴィーアリダクション譜へのカデンツァの書き込み(校訂報告資料A⁵)が自筆で残っており、K.577がモーツァルトの真作であることは間違いない。

鳥代：『全自作品目録』を見てみましょう^{注10}。こう記載されています。「[1789.7の欄に] フェッラレーゼ・デル・ベネ夫人のための私のオペラ《フィガロ》のロンド。—— 12 ヴァイオリン、ヴィオラ、2 バセットホルン、2 ファゴット、2 ホルン、バス」。これで復活上演に際してフェッラレーゼのために1789年に書かれたことがはっきりしました。

犬輔：歌詞は誰の作詩なのでしょう。

教授：フェッラレーゼはダ・ポンテの愛人であった（フェッラレージと呼んでいた）^{注11}から、《フィガロ》のための追加曲であればダ・ポンテに作詞を頼むのが妥当であろう。既存の歌詞を流用したというのであればその限りではないが、既存の出典は探し出されていない。

鳥代：1789年上演時の演奏用総譜は残っていないのでしょうか。

教授：校訂報告によれば、オーストリア国立図書館所蔵の1786年から1894年に劇場で使用されたと推定されるパート譜（校訂報告資料C）にNo.28aが挿入（Einlage）されている。その状態はオリジナルのNo.28に戻して使用することもできるようになっているとのことだ。また、ザクセン州立図書館所蔵の1789年から1793年頃にヴィーンのスコヴァティ写本工房で作成された総譜（校訂報告資料K）ではK.28aのみとなっている。時代が下ってフィレンツェ国立音楽院図書館所蔵の1803年から1806年頃のヴィーンの工房作成の総譜（パート譜を含む。校訂報告資料L）もNo.28aのみとなっている。

犬輔：No.28a=K.577の初演の時期と歌手はモーツァルトの『全作品目録』から、オペラへの差し替え箇所は資料C、K、Lから確定できるということですね。

鳥代：No.28aが含まれた復活上演は1789.8.29にやはりヴァイグルの指揮で初演されました。そして、新全集序文によれば「[復活上演は] 1789年に9回以上、1790年には少なくとも15回上演され、1791年初頭にも3回上演された。つまり、1786年版よりも大幅に長く上演されたことになる」^{注12}といえます。

犬輔：1790.5.7付けツィンツェンドルフの日誌には「オペラ《フィガロの結婚》に行く。二人の女性の二重唱、フェッラレージのためのロンドはいつも気に入っている」^{注13}と書かれており、その頃までフェッラレーゼによってNo.28aが歌われていたことが分かります。

教授：しかし諸君たちが探してきた1798年のヴィーンにおけるドイツ語上演（歌手不明）がNo.28aだからといって、上記1789-91上演のすべてに適用されるものではない。例えばずっと後の1807年のヴィーンにおけるイタリア語上演^{注14}ではNo.28に戻っている。

鳥代：とりわけプラハではNo.28aが上演されるチャンスはなかったのではないのでしょうか。

教授：そうだ。校訂報告によればコペンハーゲン王立図書館所蔵のプラハの総譜（校訂報告資料H）、バーデン州立図書館所蔵のプラハ版総譜の不完全筆写譜（校訂報告資料I）にNo.28aが含まれているという報告はない。

犬輔：では、1791.4.26の演奏会でドゥーシェク夫人がK.577を歌ったのだとすれば、どうやってその曲を知ったのでしょうか。

鳥代：フェッラレーゼは《フィガロ》（1789）のスザンナの後、《コシ・ファン・トゥッテ》（1790）のフィオルディリージを歌っていますが、プラハには行っていないのでしょうか。

教授：ブルク劇場でのダ・ポンテ《音楽の蜜蜂》（1791.3.23）上演まではヴィーンに留まっている。そしてその後はパイジエッロの《水車屋の娘》（1794.8.15）のウーディネ上演まで動向不明だ^{注15}。しかしその間プラハに行っていたとは考えにくい。

犬輔：シュタードラーがヴィーンでもプラハでもバセットホルンを演奏し、選曲にもかかわったのかも知れません。そもそも《フィガロ》（1786）に使われていなかったバセットホルンが《フィガロ》（1789）のNo.28aに使われているのは何故でしょう。

教授：シュタードラーの経歴を調べてはどうか。

犬輔：はい。「ヨーハン・ネーポムク・フランツ・シュタードラーとアントーン・パウル・シュタードラー兄弟は1773年にヴィーンの音楽芸術協会でソリストとして一緒にデビューしたが、その頃ガリツィンのオーケストラに雇われている。彼らは1779年にヴィーン宮廷と無給の契約を結び1782年には有給の宮廷管楽 kaiserlichen Harmonie 団員となった。1787年になって彼らは宮廷楽団 Hofkapelle に異動し、常勤のクラリネット奏者としてそれぞれ第1、第2奏者（アントーンが低い音を得意としたため）を受け持った」^{注16}と書かれています。1786年には宮廷楽団に雇われていなかったシュタードラー兄弟に1789年には《フィガロ》で演奏するチャンスが回ってきたということだと考えていいのでしょうか。フィガロのアリアNo.27のクラリネットへのバセットホルン代替譜もあるようです^{注17}。

鳥代：そしてプラハにシュタードラー兄弟が呼ばれたとすれば話が繋がるということね。わたしはモーツァルトが曲をドゥーシェク夫人に送ったのではないかと考えたけれど、それをほのめかすような手紙すら残っていないことから、犬輔さんの説が魅力的に思われます。

教授：いずれにせよ、あくまでも推測にすぎない。

5. ロンド「あなたを愛している人の望みどおり」K.577の構造

犬輔：K.577の構造を見ておきましょう。歌詞は新全集の楽譜から採取しました。

表1 ロンド「あなたを愛している人の望みどおり」K.577の構成

小節	詩行	調性	形式・編成
1-11	Al desio di chi t'adora, vieni, vola, oh mia speranza! Morirò, morirò se indarno ancora tu mi lasci sospirar, tu mi lasci sospirar. あなたを熱愛する者の願いとして、飛んで来て、ああ、私の希望よ！私は死んでしまいます、死んでしまいます、もし空しくあなたが私にため息をつかせるのなら、 あなたが私にため息をつかせる [のなら] 。	F	Larghetto C (2Bassethorn, 2Fg, 2Hr, 2Vn, Va, Bs)
11-17	Le promesse, i giuramenti, deh! rammenta, oh mio tesoro! e i momenti di ristoro, che mi fece Amor sperar! 約束を、誓いを、ああ！思い出してください、ああ、私の最愛の人よ！そして、愛の神が私に希望を与えてくれた安らぎの時を！	F→C	
18-33	Le promesse, i giuramenti, deh! rammenta, oh mio tesoro! e i momenti di ristoro, che mi fece Amor sperar, che mi fece, che mi fece Amor, Amor sperar! 約束を、誓いを、ああ！思い出してください、ああ、私の最愛の人よ！そして、愛の神が私に希望を与えてくれた、私に与えてくれた、愛の神が私に与えてくれた、愛の神が、愛の神が希望を[与えてくれた]安らぎの時を！	C→F コロラトゥーラ (28-33)	
33-44	Al desio di chi t'adora, vieni, vola, oh mia speranza! morirò, morirò se indarno ancora tu mi lasci sospirar, se mi lasci sospirar. あなたを熱愛する者の願いとして、飛んで来て、ああ、私の希望よ！私は死んでしまいます、死んでしまいます、もし空しくあなたが私にため息をつかせるのなら、 もし私にため息をつかせるのなら 。	F	Allegro (同上)
46-56	Ah! ch'omai, ch'omai più non resisto, ah! ch'omai, ch'omai più non resisto all'ardor che il sen m'accende, all'ardor che il sen m'accende. ああ！もう、もう、私は抵抗できません、ああ！もう、もう、私は抵抗できません、 私の心を燃え上がらせる情熱に、私の心を燃え上がらせる情熱に 。	F	
57-66	Chi d'amor gli affetti intende, compatisca il mio penar, compatisca, compatisca, compatisca il mio penar. 愛の感情を理解できる方は、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう、憐れんでくださるでしょう、憐れんでくださるでしょう、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう。	F	
66-76	Ah! ch'omai più non resisto, ah! ch'omai più non resisto all'ardor che in sen m'accende, all'ardor che in sen m'accende. ああ！もう私は抵抗できません、ああ！もう私は抵抗できません、 私の心を燃え上がらせる情熱に、私の心を燃え上がらせる情熱に 。	F カデンツァ (76)	F コロラトゥーラ (90-92)
77-94	Chi d'amor gli affetti intende, compatisca il mio penar, compatisca, compatisca, compatisca il mio penar, compatisca il mio penar. 愛の感情を理解できる方は、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう、憐れんでくださるでしょう、憐れんでくださるでしょう、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう。	F	
95-110	Chi d'amor gli affetti intende, compatisca il mio penar, compatisca il mio penar, il mio penar, il mio penar, il mio penar. 愛の感情を理解できる方は、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう、私の苦しみを憐れんでくださるでしょう、私の苦しみを、私の苦しみを、私の苦しみを。	F コロラトゥーラ (99-101)	

鳥代：今までに分析してきたアリアとは随分異なる結果が出ましたね。でもすっきりしすぎていて、もしかしたら分析方法を変えないといけないのかも知れないですよ。

教授：オペラbuffaだからオペラセーリアのアリアとは異なった結果が出て当然だ。構成表だけにとらわれず気付いたことを順不同でいいから挙げ給え。

犬輔：緩急の構成ゆえロンドと呼ぶのですね。それにしても調の構成が単純です。ところどころに変口長調やト短調への傾斜が見られるものの、へ長調を基本としてハ長調をはさむラルゲットと、もっぱらへ長調のアレグロの二部構成になっています。バセットホルンの採用によるへ長調の選定は理解できますが、転調がほとんどないのは何故でしょう。

鳥代：オペラbuffaゆえ気分の変化を大袈裟に強調しないということではないのでしょうか。例えば4-6小節の「私は死んでしまいます morirò」という部分はオペラセーリアであれば短調に転調するのですが、ここでは主調のへ長調のままです。そして伴奏の弦楽器に弱音器付き con sordino を指定し、また sf → p の強弱変化を指定する程度に抑えています。

犬輔：コロラトゥーラはオペラbuffaではほとんど例がなく、オペラセーリアではありうるとい程度ですから、歌手の聴かせどころを生かす必要があったので採用したということでしょう。この点では結果としてオペラセーリア風になったことは否めません。

鳥代：カデンツァもオペラブッフアではほとんど例がないでしょう。でも自筆のカデンツァが書き込まれているクラヴィーアリダクション版が残っていることから、オーケストラ譜もその箇所でカデンツァが奏されるのは明示されていなくても自然です。オペラ上演ではフェッラレーゼが自作のカデンツァを歌ったものと考えられます。これも結果としてオペラセーリア風となる要因のひとつですね。わたしはかつてこれらを評価して「歌手の得意とするセーリア形式に合わせた結果、スザンナが別人になったかの如く音楽的性格が変わってしまった」^{注 18}と言ったことがありました。

犬輔：第 1 バセットホルンはト音記号で書かれていますが、第 2 バセットホルンは主にヘ音記号で書かれています。第 2 奏者を低い音を得意とした弟のアントーン・シュタードラーが担当したものと思われます。

鳥代：リューニングが「K. 577 は、当初はバセットホルン 2 本とファゴット 2 本で演奏されていたが、最小限の変更を加えることで、管楽器セクションをバセットホルン 1 本とファゴット 2 本に減らすことができる」と述べていましたが、ほとんどの部分で第 2 バセットホルンパートを生かし、第 1 バセットホルンパートで補完すれば 1 本で済むでしょう。

犬輔：細かいことですが表 1 に朱記のとおり、歌詞の異同に気付きました。新全集によれば 9 小節は **tu**、42 小節は **se** になっています。詩行を繰り返す場合、どの語句を省略するかの問題です。

教授：文法的には詩行の中間を抜いた **se** が、素直な繰り返しなら詩行の前半を抜いた **tu** が選ばれるので、何れもありうる。

犬輔：でも同じパターンのところは同じ省略をするのが基本でしょう。したがってこの場合 **tu** あるいは **se** のいずれかに統一すべきです。自筆譜がないのでモーツァルトがどのようにしているかは不明ですが、バルトリ／アーノンクール^{注 19}は両者を **se** で統一していました。

鳥代：53/55 小節の **il**、71/73 小節の **in** もどちらかへの統一が必要です。

教授：**m'accende** は他動詞 **accendere** と間接目的語 **mi** からなっており、直訳すれば「私のために～を燃え上がらせる」であるから、直接目的語を必要とする。したがって **il seno** 「心」を直接目的語とするのが正しく、**in seno** という副詞句は文法的におかしい。

鳥代：英語では「**che in sen m'accende = that is burning in my heart = 私の心に燃え上がる**」としているサイト^{注 20}がありますが、英語的表現にひきずられたということなのですね。

犬輔：バルトリ／アーノンクールがどちらで歌っているのかは聞き分けできませんでした。

6. まとめ

鳥代：以上から、ドゥーシェク夫人が 1791.4.26 のプラハの演奏会で歌ったであろうロンドとして **K.577** が候補として有力であると思われます。その場合バセットホルンはシュタードラー兄弟が演奏したものと思われます。

犬輔：選曲にアントーン・シュタードラーが一枚噛んでいたことも大いにありうると思います。

教授：すでに述べたが、あくまでも推測にすぎない。

注 1：野口秀夫 (2025). ドゥーシェク夫人が歌った「バセットホルン助奏付ロンド」とは？ (その 1) —— ロンド「もはや花の Non più di fiori」K.621 No.23 ——、神戸モーツァルト研究会 第 328 回例会 ∞

注 2：Tyson, Alan (1992). NMA X/33 Abt. 2: Wasserzeichen-Katalog · Abbildungen & Textband, Kritischer Bericht, 1992 ∞

注 3：Flothuis, Marius (1989). Welche Arie sang Josepha Duschek am 26. April 1791?, in: Mitteilungen der Internationalen Stiftung Mozarteum 37, Heft 1–4, Salzburg, Juli 1989, S 81–82 ∞ (pdf の p.4388)

注 4：etymonline, Online Etymology Dictionary ∞

注 5：Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm ∞

注 6：Lühning, Helga (1974). Zur Entstehungsgeschichte von Mozarts “Titus,” in: *Die Musikforschung*, 27. Jahrg., H. 3 (Juli/September 1974), pp. 300–318 ∞

注 7：Finscher, Ludwig (1973). NMA II/5/16/1-2: Le nozze di Figaro · Band 1-2 ∞

注 8：Leisinger, Ulrich (2007). NMA II/5/16/1: Le nozze di Figaro, Kritischer Bericht ∞

注 9：Die Hochzeit des Figaro. Ein Singspiel in vier Aufzügen / mit Beybehaltung der Musik von Mozart; aus dem Italienischen übersetzt; für das kaiserl. königl. Hoftheater. - Wien : Johann Baptist Wallishauser, 1798 ∞

注 10：前掲 Leisinger (2007). *Mad^{mo} ferarese* と読み取っているが、ファクシミリを見ると *Mad^{me} ferarese* である。

注 11：Da Ponte, Lorenzo (1918). *Memorie* ∞ (初版は 1823)

注 12：前掲 Finscher (1973)

注 13：Deutsch, Otto Erich (1961). NMA X/34: Mozart. Die Dokumente seines Lebens ∞

注 14：Le nozze di Figaro. Comedia per musica tratta dal francese in quattro atti da rappresentarsi nell'Imperiali Regi Teatri di Corte. - Vienna: Gio. Batta Wallishauser, 1807 ∞

注 15：Corago Event ∞

注 16：Sadie (ed.), Stanley (1980). *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, London, Macmillan Publishers

中 17：前掲 Leisinger (2007), p.404

注 18：野口秀夫 (2023). マルティン・イ・ソレール《お人好しな気むずかし屋》への代替アリア「誰が知っているでしょう、私のいとしい人の苦しみを」K.582、「私は参りましょう、でもどこへ？」K.583 について、神戸モーツァルト研究会 第 302 回例会 ∞

注 19：Cecilia Bartoli - Mozart - *Giunse alfin il momento / Al desio di chi t'adora* ∞

注 20：The LiederNet Archive ∞

(作成：2025 年 10 月 25 日、改訂：2025 年 11 月 3 日)